

2021 年 5 月 9 日（日）「受け入れられている者の務め」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 9:7-10

- 7 さあ、あなたのパンを喜んで食べよ。あなたのぶどう酒を心楽しく飲むがよい。神はあなたの業をすでに受け入れてくださった。
- 8 いつでも衣を純白に、頭には香油を絶やさないように。
- 9 愛する妻と共に人生を見つめよ。空である人生のすべての日々を。それは、太陽の下、空であるすべての日々に、神があなたに与えたものである。それは、太陽の下でなされる労苦によってあなたが人生で受ける分である。
- 10 手の及ぶことはどのようなことでも、力を尽くして行うがよい。あなたが行くことになる陰府には、業も道理も知識も知恵もない。

《新改訳 2017》伝道者の書 9:7-10

- 7 さあ、あなたのパンを楽しんで食べ、陽気にあなたのぶどう酒を飲め。神はすでに、あなたのわざを喜んでおられる。
- 8 いつもあなたは白い衣を着よ。頭には油を絶やしてはならない。
- 9 あなたの空しい人生の間、あなたの愛する妻と生活を楽しむがよい。彼女は、あなたの空しい日々の間、日の下であなたに与えられた者だ。それが、生きている間に、日の下でする労苦から受けるあなたの分なのだ。
- 10 あなたの手がなし得ると分かったことはすべて、自分の力でそれをせよ。あなたが行こうとしているよみには、わざも道理も知識も知恵もないからだ。

【序論】

私たちの人生に起きてくる諸々の出来事は、どのような文脈に置くかによってその意味が変わってきます。これは、本書を通して学んでいるテーマの一つです。実は、今日の箇所における著者の言及には若干の矛盾があります。「神」の存在が念頭にありながら、「神なしの世界観」である「太陽の下」という表現を同時的に使っているのです。私が今回この箇所の黙想を始めて最初に気づいたのは、この「矛盾」でした。彼は同じ一つの人生を二つの角度から見ているようなのです。神がおられることを前提とした見方と、神が存在しないことを前提とした見方です。どちらを選ぶかによって人の生き方は大きく変わってくる。その違いを見出していくことが今日のポイントです。

今日の箇所では、人が楽しむべき人生の営みが4つにまとめ上げられています。

①飲食 ②お洒落 ③結婚 ④仕事

これらの珍しくもない日常の営みに、私たちはどう取り組んでいるか。

【本論】

今日の箇所と共通する内容は、私が知る限り既に5回本書に出てきました。

- ①2:24-26 飲食と労苦の内に幸せを見出す
- ②3:12-13 飲食と労苦の内に幸せを見出す
- ③3:22 自分の業を楽しむ
- ④5:18-20 富と宝により飲食と労苦を楽しむ
- ⑤8:15 飲食の楽しみは日々の労苦の対価

以上を回想してみると、コヘレトにとって人生の楽しみを中心にあるものが見えてくるでしょう。しかし、今日の箇所では少し加えられている。それは「お洒落」と「結婚」なのですが、テキストの内容に沿って話を進めていきたいと思います。

〔大前提〕

神はあなたの業をすでに受け入れてくださった。(9:7b)

意図あって7節の後半から読ませていただいたのですが、それはこの部分が今日の最重要ポイントであり、すべての前提であるからです。このワンフレーズに、信仰者の人生のすべてが詰まっている。それは、私たちが「既に神に受け入れられた存在」として地上の一切の営みに従事しているということです。これは「信仰義認」の教理に通ずるところがあり、神を信じ恵みに依り頼んで生きる人にとっては、万事が「神からの賜物である」という文脈上に置かれ、感謝をもって受け取られるものになるのです。マイケル・A・イートンという注解者は「これは、伝道者〔コヘレト〕が、『信仰による義』という教理に最も接近したもので、ほとんどパウロ的な筆致である」(p.162)と言っていますが、これは正しいと思います。

本論 1. 飲食

さあ、あなたのパンを喜んで食べよ。あなたのぶどう酒を心楽しく飲むがよい。(9:7a)

飲食の楽しみを勧めることにおいてはこれまでと変わりはありませんが、一歩進んだ点があります。それは、この文章が「命令形」になっているということです。これまでの語り方は「**食べて飲み、労苦の内に幸せを見いだす。これ以外に人に幸せはない**」(2:24)

という具合に、人生をあるがままに受け入れていくほかないというやや諦めのイメージでしたが、ここではもっと積極的にこの同じ営みに取り組んでいくことが勧められています。それは、やがて訪れる「死」という出来事に照らしての緊急性です。人は皆死ぬのだから、与えられた時間を無駄にしてはならない。一回一回の食事を何となく通過するのではなく、その時間を最大限に喜び楽しみなさいと。神はむしろ、私たちが人生を何となく過ごして終えていくことではなく、その営みの一つひとつを「賜物」として大切にすることを願っておられる。そういう私たちの姿を目を細めて見ておられるのだ。

本論 2. お洒落

いつでも衣を純白に、頭には香油を絶やさないように。(9:8)

ここに、楽しむべき人生の営みの新たな要素が出てきました。「衣を純白にする」「頭に油を注ぐ」とは、基本的にはパレスチナの暑く乾燥した気候の下にあって、気持ちよく過ごすための知恵です。日光を吸収しにくい白い服を着、油で肌を守る。同時に、これらは祭に行く際の装いを指しているとも考えられます。

お洒落というものへの関心は、ある程度生活にゆとりがなくては出てこないかもしれませんが、ただ、社会的な生き物である以上、人間は身だしなみに気を配る必要があります。元々人間は裸でありましたから、服を着ることは罪との関わりがないとはいえませんが、主は罪をお赦しくださり、今やファッションをも文化形成の一部として祝福してくださっています。過度に着飾ることは自らを武装しかえって自分の内面を隠すものともなりえますが、適度なお洒落は人生の楽しみとなる。自分に合った服装を見つけることは喜びであり、神の祝福を味わう機会となるのです。

本論 3. 結婚

愛する妻と共に人生を見つめよ。空である人生のすべての日々を。それは、太陽の下、空であるすべての日々に、神があなたに与えたものである。それは、太陽の下でなされる労苦によってあなたが人生で受ける分である。(9:9)

ここでは「結婚」という営みが、人間に与えられた祝福として描かれています。これはアダムとエバの出会いから今に至るまで人類史を築き上げてきたものです。結婚は人の人生において最も大きな出来事の一つであり、飲食やファッションとは一線を画すもの(契約的な営み)です。そして、そこには子孫を得るという結果が伴うこともあります。一つ、この箇所には隠された問題点がありますので、ふれておきたいと思います。実は、

9節冒頭の「妻」という言葉は原文では定冠詞のない「הַיִּשְׁתָּ / イシャー」であり、単純に「女性」と訳すこともできるのです。それを根拠に、中には男女の無差別の関わりが奨励されていると捉える人もいますが、イスラエルの知者であるコヘレトがそのような無秩序を推奨しているとは考えにくいでしょう。むしろ、神が定め給うた結婚という制度の下で、その祝福を味わうことが勧められていると思われます。

本論 4. 仕事

手の及ぶことはどのようなことでも、力を尽くして行うがよい。あなたが行くことになる陰府には、業も道理も知識も知恵もない。(9:10)

労働の喜びについては既に何度も語られてきました。働くことは時に辛い営みとなり得ますが、これを神から来る創造的な業、神のものを管理する責任、文化を発展させ、壊れたものを修復し、未知なる神の世界を発見していくこととして捉えていくときに、大きな喜びとなります。私には牧会という務めが与えられていますが、聖書を学んでその真理をお伝えすることを生業とさせていただくことができ、このような人生が与えられていることをどれほど感謝しているか分かりません。時には教会の問題に悩み、その解決のために多くのエネルギーを費やさなくてはならないこともありますが、それも含めて神様が与えてくださっている働きであり、人間としての成長の機会だと捉えております。

どのような仕事であったとしても「力を尽くして行う」(הִתְחַבֵּץ / 直訳：力の中で) ことが勧められている。何かをするチャンスがあるならば、その機会を逃さずベストを尽くしてやってみよう励まされています。その理由として「**あなたが行くことになる陰府には、業も道理も知識も知恵もない**」ということが言われていますが、これは私たちがやがては死ぬべき存在であり、地上での時間が限られているということを意味します。「業」「道理」「知識」「知恵」というものは、生きている時間だけ人間に関わっているものである。死に際してはそれらと無関係になってしまう。だから「今」という時を大切にしなければなりません。

【展開】

ここで語られているコヘレトの言葉の前提には「死後のいのち」がありません。とはいえ、本書の最後を読むならば、彼が「死後の審き」を信じていることが薄っすらと伝わってきます(12:14)。しかし、コヘレトは基本的に「今の世をどう生きるか」という

ことに焦点を絞って読者に訴えかけています。クリスチャンは新約聖書を知っているため、すぐに「いやいや、永遠のいのちが約束されているではないか」と反論したくなるかもしれませんが、その希望を逆手に取って現在を怠惰に生きることは勧められてはいはずです（Ⅱテサロニケ 3:6-12）。むしろ、神が与えてくださったこの人生を如何に生きるか、どうしたら賜物を十二分に生かして神にお返しすることができるかを主眼として歩むことが、本書では教えられているのです。

【結論】

誤解のないように加えるならば、永遠のいのちの希望を見ないようにすることが勧められているわけではありません。むしろ、その希望に立つとき、この世界全体に満ちているものが「神のもの」として認識されるようになるでしょう。自分の心や体もそうです。「神のもの」を如何に管理し、良いものに整え、神にお返しするかということを考えながら歩んでいきたい。コヘレトはとかく地上の限られた時間にこだわり、その時間を無駄にしないように、どんなに小さな物事でも神から来るものとして喜んで取り組むよう教えているのです。そして、その大前提には、私たちが既に神によって受け入れられているという恵みが先立っています。

【祈り】

私たちに人生を与えてくださった、天の父なる神様。一切のものは賜物として与えられました。しかし、それを無意識的に自分のものとしている私たちがいます。そこに、厄介な執着心が湧いてきます。むしろ、すべてを「あなたのもの」として捉え、一つひとつの営みを愛し、心から取り組み、育て、増やし、あなたにお返しする、喜びと解放に満ちた人生を歩ませてください。この世界に満ちるすべてのものはあなたのものです。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

ご自身が創造された世界を愛し、その土地の管理を人類に託し給うた、父なる神の愛、信仰により、全く神に受け入れられた者とならせ給う、主イエス・キリストの恵み、地上の一切の営みを、主にあつて喜び楽しませ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。